火野事件

大岡昇平

新潮社版

装画・豊福知徳
口絵写真・篠山紀信
外箱写真・田沢　進
© Shōhei Ōoka
Printed in Japan 1978

野火・事件
〈新潮現代文学23〉
昭和五十三年十一月十日　印刷
昭和五十三年十一月十五日　発行
定価一二〇〇円
著者　大岡昇平
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町七一
業務部・(〇三)二六六一五一一一
編集部・(〇三)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大口製本株式会社
乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

野火 5
事件 101
解説 百目鬼恭三郎 399
年譜 406

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

野火・事件

野　火

たといわれ死のかげの谷を歩むとも

ダビデ

一　出　発

私は頬を打たれた。分隊長は早口に、ほぼ次のようにいった。

「馬鹿やろ。帰れっていわれて、黙って帰って来る奴があるか。帰るところがありませんって、がんばるんだよ。そうすりゃ病院でもなんとかしてくれるんだ。中隊にゃお前みてえな肺病やみを、飼っとく余裕はねえ。見ろ、兵隊はあらかた、食糧収集に出動している。味方は苦戦だ。役に立たねえ兵隊を、飼っとく余裕はねえ。病院へ帰れ。入れてくんなかったら、幾日でも坐り込むんだよ。まさかほっときもしねえだろう。どうでも入れてくんなかったら——死ぬんだよ。手榴弾は無駄に受領してるんじゃねえぞ。それが今じゃお前のたった一つの御奉公だ」

私は喋るにつれ濡れて来る相手の唇を見続けた。致命的な宣告を受けるのは私であるのに、何故彼がこれほど激昂しなければならないかは不明であるが、多分声を高めると共に、感情をつのらせる軍人の習性によるものであろう。情況が悪化して以来、彼等が軍人のマスクの下に隠さねばならなかった不安は、我々兵士に向って爆発するのが常であった。この時わが分隊長が専ら食糧を語ったのは、無論これが彼の最大の不安だったからであろう。

いくら「坐り込ん」でも病院が食糧を持たない患者を入れてくれるはずはなかった。食糧は不足し、軍医と衛生兵は、患者のために受領した糧秣で食い継いでいたからである。病院の前には、幾人かの、無駄に「坐り込ん」でいる人達がいた。彼等もまたその本隊で「死ね」といわれていた。

十一月下旬レイテ島の西岸に上陸するとまもなく、私は軽い喀血をした。水際の対空戦闘と奥地への困難な行軍で、ルソン島に駐屯当時から不安を感じていた、以前の病気が昂じたのである。私は五日分の食糧を与えられ、山中に開かれていた患者収容所へ送られた。血だらけの傷兵が碌々手当も受けずに、民家の床にごろごろしている前で、軍医はまず肺病なんかで、病院へ来る気になった私を怒鳴りつ

けたが、食糧を持っているのを見ると、入院を許可してくれた。
三日後私は治癒を宣されて退院した。しかし中隊では治癒と認めない、五日分の食糧を持って行った以上、五日おいて貰え、といった。私は病院へ引き返した。あの食糧は五日分とはいえない、もう切れたと断られた。そして今朝私は投げ返されたボールのように、再び中隊へ戻って来たのであるが、それはただ私の中隊でもまた「死ね」というかどうかを、確めたかったからにすぎない。
「わかりました。田村一等兵はこれより直ちに病院に赴き、入院を許可されない場合は、自決いたします」
兵隊は一般に「わかる」と個人的判断を誇示することを、禁じられていたが、この時は見逃してくれた。
「よし、元気で行け。何事も御国のためだ。最後まで帝国軍人らしく行動しろ」
「はいっ」
室内には窓際に汚い木箱を机にして、給与掛の曹長が何か書類を作っていた。我々の会話が聞えないように、黙って背中を向けていたが、私が傍へ行って申告すると、立ち上り、細い眼をさらに細くしていった。
「よし、追い出すようで気の毒だが、分隊長の立場も考えてやらんといかん。犬死するなよ。糧秣をやるぞ」
彼は室の隅の小さな芋の山から、いい加減に両手にしゃくって差し出した。カモテと呼ばれ、甘藷に似た比島の芋であった。礼をいって受け取り、雑嚢へしまう私の手は震えた。私の生命の維持が、私の属し、そのため私が生命を提供している国家から保障される限度は、この六本の芋に尽きていた。この六という数字には、恐るべき数学的な正確さがあった。
敬礼して廻れ右をすると、分隊長の声が追って来た。
「隊長殿には申告せんでもいいぞ」
一瞬中隊長にいえば助かるかも知れないと思ったが、これは未練であった。前線では将校は下士官の集団的意志に屈していた。隊長室はこの室からひと跨ぎの、渡廊下で繋いだ別棟にあったが、入口を覆ったアンペラは静まり返っていた。
「申告しないでもいい」とは、私の場合が前日病院へ送り返された時、決着していたことを示していた。今日私が帰って来たのは、まったく余計なことであった。だからこれは純然たる分隊長の問題だったわけである。
半ば朽ちた木の階段を下りると、木の間を透して落ちる陽が、地上に散り敷いていた。横手に彼岸花に似た褪紅色の花を交えた叢が連り、その向うの林の中で、十数人の兵士が防空壕を掘っていた。
円匙が足りないので、民家で見つけた破れ鍋や棒を動員して掘って行く。敗残兵同様となってこの山間の部落に隠

れている我々を、米軍はもう爆撃しにも来なかったが、壕はとにかく我々の安全感のために必要であった。それに我我にはほかにすることがなかった。

林の蔭で兵士達の顔はのっぺりと暗かった。中に顔を挙げて私の方を見る者も、すぐ眼を外らし、下を向いて作業を続ける。

彼等は大部分内地から私と一緒に来た補充兵である。輸送船の退屈の中で、我々は奴隷の感傷で一致したが、古兵を交えた三カ月の駐屯生活の、こまごました日常の必要は、我々を再び一般社会におけると同じエゴイストに返した。そしてそれはこの島に上陸して、情況が悪化すると共に、さらに真剣にならざるを得なかった。

私が発病し、世話になるばかりで何も返すことが出来ないのが明らかになると、はっきりと冷いものが我々の間に流れた。危険が到来せずその予感だけしかない場合、内攻する自己保存の本能は、人間を必要以上にエゴイストにする。私は彼等の既に知っている私の運命を、告げに行く気がしなかった。彼等の追いつめられた人間性を刺戟するのは、むしろ気の毒である。

前方の路傍の木の根元に五、六名の衛兵が屯していた。そしてこれが現在、中隊の位置に残っている兵力の全部であった。

タクロバン地区における敗勢を挽回するため、西海岸に揚陸された、諸兵団の一部であったわが混成旅団は、水際で空襲され、兵力の半数以上を失っていた。重火器は揚陸する隙なく、船諸共沈んだ。しかし我々は最初の作戦通りブラウエン飛行場目指して、中央山脈を越える小径を行軍したが、山際で先行した別の兵団の敗兵に押し戻された。先頭は迫撃砲を持つ敵遊撃隊の活動によって混乱に陥り、前進不可能だという。我々は止むを得ず南方に道なき山越えの進路を取ったが、途中三方から迫撃砲撃を受けて再び山麓まで下り、この辺一帯の谷間に分散露営して、なすところなくその日を送っていた。オルモック基地に派遣された連絡将校は進撃の命令を伝えたが、部隊長はそれを握りつぶしていると噂された。

オルモックを出発する時携行した十二日分の食糧は既になかった。附近部落に住民が遺棄した玉蜀黍その他雑穀も、すぐ食べつくした。実数一個小隊となった中隊兵力の三分の一は、かわるがわる附近山野に出動して、住民の畠から芋やバナナを集めて来た。というよりは食い継ぎに出て行った。四、五日そうして食べて来ると、交替に次の三分の一が出動する間、留守隊を賄うだけの食糧を持って帰って来るのである。附近の部落に散在する部隊も、同様の手段で食糧をあさっていて、我々は屢々出先で畠の先取権を争い、出動の距離と日数は長くなった。

喀血して荷が担げない私は、この食糧収集に加わるこ

とが出来ない。私が死ねといわれたのは、このためである。

私は木の間を歩き衛兵達に近づいた。彼等は土に腰を下し、迎えるように私を見守っていた。衛兵司令に隊から棄てられたことを、繰り返すのもいやであったが、彼等の無関心な同情に、惨めな姿を曝すのが一層苦痛であった。待ち設けるような視線の中を歩いて、彼等の位置に達するまでの時間は長かった。

衛兵司令の兵長はしかし私の形式的な申告を聞くと顔色を変えた。満州の設営隊から転属になったこの色白の土木技師は、彼自身の不安を想起させられたのである。

「出て行くお前がいいか、残った俺達がいいかわかったもんじゃねえ。どうせ斬込みだからな」と呟いた。

「病院じゃ入れてくれないんだろう」と兵士の一人がいった。

私は笑って、

「入れてくれなかったら、入れてくれるまで頑張るのさ」

と分隊長にいわれたままを繰り返した。私は早くこの場面を切り上げることしか、考えていなかった。

別れを告げる時、偶然顔を見合せた一人の兵士の顔は歪んでいた。私自身の歪んだ顔が、欠伸のように伝染したのかも知れない。私は出発した。

二　道

部落の中はアカシヤの大木が聳え、道をふさいで張り出した根を、自分の蔭で蔽っていた。住民の立ち退いた家々は戸を閉ざし、道に人はなかった。敷きつめた火山砂礫が、褐色に光り、村をはずれて、陽光の溢れる緑の原野にまぎれ込んでいた。

臓腑を抜かれたような絶望と共に、一種陰性の幸福感が身内に溢れるのを私は感じた。行く先がないというはかない自由ではあるが、私はとにかく生涯の最後の幾日かを、軍人の思うままではなく、私自身の思うままに使うことが出来るのである。

行く先は、心ではきまっていた。衛兵に告げた通り、病院へ行くのである。無駄な歎願を繰り返すためではない。あそこに「坐り込ん」でいる人達に会うためである。会ってどうするあてもなかったが、ただ私と同じく行く先のない彼等を、私はもう一度見たかった。

野が展けた。正面は一粁で林に限られたが、右は木のない湿原が尻ひろがりに遠く退いた先に、この島の脊梁をなす火山性の中央山脈の山々が重なり、前山の一支脈は延びて、正面の林の後へ張り出して来ていた。その伏した女の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

背中のような起伏が、次第に左へ低まり、一つの鼻でつきたところに、幅十間ばかりの急流が現われ、丘はまたその対岸に高まって、流れに沿って下り、この風景の左側を囲っていた。その先に海があるはずであった。

病院は正面の丘を越えて、約六粁の行程である。

午後の日は眩しかった。嵐を孕むと見えるほど晴れて輝く空は、絶えずその一角を飛ぶ、敵機の爆音に充たされていた。その蜜蜂の羽音のような単調な唸りの間に、時々何処か附近の山々で散発する迫撃砲の音が混った。開けた野に姿を曝すのは、敵機に狙われる危険があったが、この時の私には怖れる理由がなかった。

私は手拭を帽の下に敷いて汗の流れるのを防ぎ、銃を吊革で肩にかけて、元気に歩いて行った。熱はやはりあるらしかったが、私は昔からこの熱に馴れていた。それはかつて青春の欲望を遂行するには、巧みに折り合わねばならぬ障害であったと同じく、今は私の生涯の最後の時を勝手に生きるため、当然無視すべき一状態にすぎなかった。病気は治癒を望む理由のない場合何者でもない。

私は喉からこみ上げて来る痰を、道傍の草に吐きかけ吐きかけ歩いて行った。私はその痰に含まれた日本の結核菌が、熱帯の陽にあぶられて死に絶えて行く様を、小気味よく思い浮べた。

林の入口で道は二つに分れていた。正面は丘を越えて真直に病院へ行く道、左は林の中に丘の鼻を廻って、同じ谷間へ入る道である。丘越えの道が無論近いが、私は既に昨日から二度往復してその道に飽きていた。目的のない者の気紛れから、私は未知の林中の道を取る気になった。

林の中は暗く道は細かった。樫や櫟に似た大木の聳える間を、名も知れぬ低い雑木が隙間なく埋め、蔦や蔓を張りめぐらしていた。四季の別なく落ち続ける、熱帯の落葉が道に朽ち、柔らかい感触を靴裏に伝えた。静寂の中に、新しい落葉が、武蔵野の道のようにかさこそと足許で鳴った。私はうなだれて歩いて行った。

奇怪な観念がすぎた。この道は私が生れて初めて通る道であるにも拘らず、私は二度とこの道を通らないであろう、という観念である。私は立ち止り、見廻した。

なんの変哲もなかった。そこには私がその名称を知らないというだけで、色々な点で故国の木に似た闊葉樹が（直立した幹と、開いた枝と、垂れた葉と）静まり返っているだけであった。それは私がここを通るずっと前から、私が来る来ないに拘らず、こうして立っていたであろうし、いつまでもこのままでいるであろう。

これほど当然なことはなかった。そして近く死ぬ私が、この比島の人知れぬ林中を再び通らないのも当然であった。奇怪なのは、その確実な予定と、ここを初めて通るという事実が、一種の矛盾する聯関として、私に意識されたこと

である。

もっとも私は内地を出て以来、こういう不条理な観念や感覚に馴れていた。例えば輸送船が六月の南海を進んだ時、ぼんやり海を眺めていた私は、突然自分が夢の中のように、整然たる風景の中にいるのに気がついた。

紺一色の海が拡がり、水平線がその水のヴォリュームを押し上げるように、正しい円を画いて取り巻いている。海面からあまり離れていない一定の高さに、底部が確然たる一線をなしたお供餅のような雲が、恐らくは相互に一定に距離を保って浮んでいる。そしてそれが船が一律の速度で進むにつれ、任意の視点を中心に、扇を廻すように移って行く。舷側をすぎて行く規則正しい波の音と、単調なディーゼルエンジンの音に伴奏されて、この規則正しい風景は、その時私に甚だ奇怪に思われた。

偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかった。そして機械によって一定した速度で進む船から眺める以上、風景が一様の転移を見せるのも当然であった。私は即座にこう反省したにも拘らず、私の昂奮はなかなか去らなかった。そこには一種快い苦痛のニュアンスがあったのである。

もしこの時私が一遊覧客であったならば、帰国後自国の陸に繋がれた哀れな友人に、大洋の奇観を語る場面を空想したろう。私の昂奮と苦痛は多分、敗戦と死の予感に冒されていた私が、その奇怪な経験を人に伝えることを、予想出来ないことに基いていたろう。

比島の林中の小径を再び通らないのが奇怪と感じられたのも、やはりこの時私が死を予感していたためであろう。我々はどんな辺鄙な日本の地方を行く時も、決してこういう観念には襲われない。好む時にまた来る可能性が、意識下に仮定されているためであろうか。してみれば我々の所謂生命感とは、今行うところを無限に繰り返し得る予感にあるのではなかろうか。

比島の熱帯の風物は私の感覚を快く揺った。マニラ城外の柔らかい芝の感覚、スコールに洗われた火焔樹の、眼が覚めるような朱の梢、原色の朝焼と夕焼、紫に翳る火山、白浪をめぐらした珊瑚礁、水際に陰を含む叢等々、すべて私の心を恍惚に近い歓喜の状態においた。こうして自然の中で絶えず増大して行く快感は、私の死が近づいた確実なしるしであると思われた。

私は死の前にこうして生の氾濫を見せてくれた偶然に感謝した。これまでの私の半生に少しも満足してはいなかったが、実は私は運命に恵まれていたのではなかったか、という考えが閃いた。その時私を訪れた「運命」という言葉は、もし私が拒まないならば、容易に「神」とおき替え得るものであった。

明らかにこうした観念と感覚の混乱は、私が戦うために海を越えて運ばれながら、私に少しも戦う意志がないため、意識と外界の均衡が破れた結果であった。歩兵は自然を必要の一点から見なければならない職業である。土地の些細な凸凹も、彼にとって弾丸から身を守る避難所を意味し、美しい緑の原野も、彼にはただ素速く越えねばならぬ危険な距離と映る。作戦の必要により、あなたこなた引き廻される、彼の眼に現われる自然の雑多な様相は、彼にとって、元来無意味なものである。この無意味さが彼の存在の支えであり、勇気の源泉である。

もし臆病或いは反省によって、この無意味な統一が破れる時、その隙間から露呈するのは、生きる人間にとってさらに無意味なもの、つまり死の予感であろう。

三　野　火

私はいつか歩き出していた。歩きながら、私は今襲われた奇怪な観念を反芻していた。その無稽さを私は確信していたが、一種の秘密な喜びで、それに執着するものが、私の中にあったのである。

道は林の中で丘裾の線をなぞって自然にうねっていた。緑の丘肌が木々のあわいに輝いた。林が途切れると、丘の夢幻的な緑を形づくる雑草が、道傍まで降りて来た。平らな稜線に、人に似た矮小な木が、ぽつんと立っているのを、私は認めた。

林が尽き、乾いた砂利と砂に、疎らに草の生えた野へ出た。河原であった。処々島のように点在した高みに、芒の群が遅い午後の光に銀色の穂を輝かせた。川はその向うに、一条の鋼鉄の線をなして横わり、風景を切って遽だしく滑っていた。対岸は多摩の横山ほどの高さの丘陵が、やはり淡い草の緑を連ね、流れを遡って右へ右へと退いて行った。そして遂に崖となって河原へ落ち込んだ下に、一条の黒い煙が立ち上っていた。

煙は比島のこの季節では、収穫を終った玉蜀黍の殻を焼く煙であるはずであった。それは上陸以来、我々を取り巻く眼に見えない比島人の存在を示して、常に我々の地平を飾っていた。

歩哨はすべて地平に上がる煙の動向に注意すべきであった。ゲリラの原始的な合図かも知れないからである。事実不要物を焚く必要から上がる煙であるか、それとも遠方の共謀者と信号する煙であるかを、煙の形から見分けるという困難な任務が、歩哨に課せられていた。

今見る川向うの煙は、明らかにその下で燃やされる物の大きな量を思わせる、幅広の盛んな煙であった。黒いその下部に、私は時々橙色の焔の先が侵入するのを認めた。

しかし歩哨の習慣を身につけていた私に、煙は開いた河原に姿を現わすのを、躊躇わすのに十分であった。それが単なる野火であるにせよ、ないにせよ、その下に燃焼物と共に比島人がいるのは明瞭であった。そして我々にとって比島人はすべて実際は敵であった。

私は初めて見知らぬ道を選んだことを後悔した。しかし既に死に向って出発してしまった今、引き返すのはいやであった。私は右手に丘を縁取る道なき林の中を迂回して、河原の道が前方で、また別の林に入っているところまで、辿りつくことにした。

垂れ下がる下枝や、足にからむ蔓を、帯剣で切り払いながら、私は進んだ。湿った下草を踏む軍靴は、滑り易かった。方向を失わないため、河原からの明るい反射が、羊歯類をエメラルドに光らす距離を、林縁と保った。そこにも道があった。辿って林の奥に進むと、一軒の小屋があり、人がいた。一人の比島人が眼を見開いて立っていた。

私は立ち止り、銃を構え、素速くあたりへ眼を配った。

「今日は、旦那」

と彼は媚を含んだ声でいった。年の頃三十くらいの顔色の悪い比島人である。色褪せた空色の半ズボンの下から、痩せて汚れた足が出ている。住民の尽く逃亡したはずのこのあたりで、彼の存在がすでに怪しかった。

「今日は」

と私はおぼつかないビサヤ語で機械的に答え、なおも周囲を検討した。静かであった。小屋は一尺しか床上げがしてなく、前後は開け放されて、裏まで見通せた。刺戟性の異臭があたりに漂っていた。

「You are welcome」

と比島人は私の手にある銃を見ながら、卑屈に笑った。その時私の口を突いて出たのは、私がそれまで思ってもみなかった、次の言葉であった。

「玉蜀黍はあるか」

男の顔は曇ったが、相変らず「ユー、アー、ウェルカム」を繰り返しながら、いざなうように先に立ち、小屋の裏へ廻った。そこに土を掘って火を仕掛け、大きな鉄鍋がかけてあった。中には黄色いどろどろの液体が泡を吹いていた。傍の土に黄色い山の芋がころがっているところを見ると、それを煮つめているらしい。異臭はその液体から昇って来るのである。

別の小鍋に玉蜀黍の粒をほぐしたのが煮てあった。彼はそれをすくって汚い琺瑯引きの皿に盛り、黒い大粒の塩を添えて薦めた。私はその時全然食欲がないのに気がついた。

「ここはお前の家か」

「いや、家は川向うだ」

と彼は答え、木の間越しに川を指さした。臭い山の芋を煮て何にするかは不明であるが、どうやら彼は専らこの作

業のため、ここへ来ているらしい。芋はこのあたりで採れるのであろう。「何にするのか」と訊いたが、彼の答えたビサヤ語は、私には理解出来なかった。

私は皿を前にして、ぼんやり床に腰かけていた。男は絶えず張りつけたような笑いを浮べ、私の顔を見詰めていた。

「食べないのか」

私は首を振り、腰の雑嚢にその玉蜀黍を開けながら、食欲がないのに、食物を要求した自分を嫌悪していた。

私は既にその男に対する警戒を解いていた。我々は一般に比島人の性格を見分けるほど、観察の経験も根気も持っていなかったが、絶えず私の視線を迎えて微笑もうとしている彼の顔は、単に圧制者に気に入られようとする、人民の素朴な衝動のほか、何ものも現わしていないように思われた。それに、これは私が生涯の終りに見る、数少ない人間の一人であるべきであった。

彼は突然思いついたという風に、

「芋をやろうか」といった。

「この芋は食えまい」

「いや、ほかのがある。待っててくれ」

彼は立ち上り、林の奥へ歩いて行った。私はぼんやりそのあとを見送っていた。彼は振り向きもせず、ずんずん歩いて、やがて横手の窪地に降りて、見えなくなった。

私は改めて荒れはてた小屋の内部を見廻した。汚れた床板は処々はがれ、竹の柱は傾き、あらわな板壁にやもりが匍っていた。そういうがらんとした小屋の内部は、必要以上に生活を飾ろうとしない、比島の農民の投げやりな営みが現われていた。

（この男達の間にまじって、まだ生きられるかも知れない）と私は思った。

男はなかなか帰らなかった。私は不安になった。立ち上った時の彼の素速い動作が思い出された。私は林の奥で、彼の消えたあたりまで行って見た。木々がしんと静まり返っているばかりであった。（逃げたな）と思うと怒りがこみ上げて来た。急いで林の縁まで出て見ると、果して遠く川の方へ転がるように走って行く後姿が見えた。

振り返って私の姿を認めると、拳を威嚇するように頭の上で振り、それからまた駈けて行った。その距離は到底弾の届きそうもない、届いても当りそうもない距離である。彼の姿はやがて輝く芒に隠れた。

私は苦笑した。マニラで比島人の無力な憎悪の眼を見て以来、彼等に友情を求めるのがいかに無益であるか、私はよく知っていたはずである。私は小屋に帰り、山の芋を煮た鍋を蹴返して、その場を去った。彼が逃げた以上、ここに止るのは危険である。

私は大胆に開けた河原に、自分の姿を現わした。彼が川向うまで逃げて行ったところを見れば、この地点は今は安

全なのである。それはこの附近に彼が救いを求むべき人のいないことを意味した。少なくとも彼が川向うの仲間を連れて、引き返して来るまでに、ここを去ればよい。

私は足早に砂利を踏んで河原を横切り、前方の林の入口でもとの道に入った。この林の木は小さく幹は細かった。蟻塚が道傍にうず高くつもり、蟻が吹き出すように溢れていた。私は慎重に前方を警戒しながら進んだ。いかに推理によって安全を確信していたとはいえ、私の恐怖にとっては、逃げた男はこの道に比島人のいる可能性だったのである。警戒は私から瞑想を奪った。

林が切れた。川向うには依然として野火が見えた。いつかそれは二つになっていた。遠く、人が向うむきに蹲まった形に孤立した丘の頂上からも、一条の煙が上っていた。麓の野火は太く真直にあがったが、丘の上の野火は少し昇ると、空の高い所だけに吹く風を示して倒れ、先は箒のようにかすれていた。麓の煙が空気の重さと争うように、早く勢込めて騰るのに対し、丘の煙は細く高く、誇らかに騰って、空の風と戯れるように、揺れて靡いて流れていた。この気象学的常識に反した、異なる形の煙の一つの風景の中の共存は、奇妙な感覚を与えた。

丘の煙は恐らく牧草を焼く火であろうが、我々の所謂「狼煙」にかなり似ていた。しかしなんの合図であろう。

私は焦立った。右手の丘はますます迂回されつつあった。女の背のような優美な側面は、いつか意外に厳しく狭い正面に変り、三角の頂上から、両足をふんばったように、二つの小尾根を左右に投げ落していた。そしてそのあわいの小さな窪みに、肱掛椅子の形の玄武岩を支えていた。先の方の尾根を廻れば、病院のある谷間へ出るかも知れない。私は足を早めた。

また林に入った。中で道は二つに分れていた。左は川沿いに遡る道、右が丘に添う道らしい。右へ取って少し行くと林が尽き、広い草原が拡がった。そしてそこに私はまた野火を見た。

川の側は林が続き、川と一緒に左へ左へとそれて行っていた。前は一粁ばかり草原が砂丘のように、ゆるやかに起伏した果てに、岩を露出した別の丘が、屏風のように立ちふさがっていた。そして私とその丘との中央に、草が半町ほどの幅で燃えていた。人はいなかった。

私はその煙を眺めて立ち尽した。

私の行く先々に、私が行くために、野火が起るということはあり得なかった。一兵士たる私の位置と、野火を起すという作業の社会性を比べてみれば、それは明らかであった。私は孤独な歩行者として選んだコースの偶然によって、順々に見たにすぎない。

私の不安はやはり内地を出て以来の、奇妙な感覚の混乱に属していた。不安の唯一の現実的根拠は、野火のあると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com